

百谷出身の津山藩医・

久原洪哉

津山で西洋医学といえは宇田川家や箕作家が有名ですが、久原家も古くから西洋医学を学んだ医者を輩出した医家でした。

久原家は森家時代から津山藩に仕え、森家改易後、甫雲良賢の代から藩医として松平家に仕えました。甫雲は国内で蘭学が未開花であった延宝五年（一六七七）にすでにオランダ流外科医学を学び免許状をもらっており、開明的な人物であったことがわかります。この甫雲から九代目にあたるのが久原洪哉です。

久原洪哉（宗甫・幸哉・百溪・経侯）は、文政八年（一八二五）に西北条郡井村（現在の百谷）で、医師・難波周造（秀造・周蔵）の長男として生まれました。六歳の時に津山に出



久原洪哉

(津山洋学資料館寄託資料)

て漢学を学び、十代の頃から医術修業を志し、苦学の後に天保十四年（一八四三）に京都で西洋医術や蘭学を学び、塾長も務めました。そこで同時期に大坂・京都に遊学していた久原家の跡継ぎで、同年でもあった久原宗哲と知り合い、深い親交を結ぶこととなります。

しかし、宗哲は嘉永五年（一八五二）重い病にかかり、その死に際して「洪哉は温厚篤実な人物であるため、妹を嫁がせて久原家を継がせてほしい」と遺言し、宗哲の父・宗甫は遺言どおり洪哉を婿養子としました。洪哉二十九歳の時です。その翌年義父・宗甫が亡くなると久原家を継ぎ当主となりました。そして再び大坂に出て華岡南洋（華岡青洲の女婿）の下で外科を学び、津山で開業しました。さらに、天然痘の予防法として当時広まりつつあった種痘法を津山で広めようと、種痘館の設立を藩に提案し、その中心として尽力しています。

明治維新前後は、藩医として長州征伐や大坂・京都・江戸へ藩主に付

き従い、優秀

な医者を推薦

したり、藩医

の子弟に西洋

医術を学ばせ

たりしていま

す。また、明

治三年（一八

七〇）には、

藩主の奥方・

儀姫の乳ガン

の治療を同じ

藩医の宇田川

興斎とあたり、

摘出手術は華岡

流外科を学んだ

洪哉

自ら執刀し成功

させ、儀姫からお

礼に洪哉の妻へ打

掛が贈られています。

廃藩置県によつて

津山藩がなくな

り藩医の職を解か

れた後も、津山の

牛乳生産のきっかけ

を作ったり、明

治十二年（一八七

九）にコレラが流

行した際には、私

財を投げ打って予

防薬を人々に与え

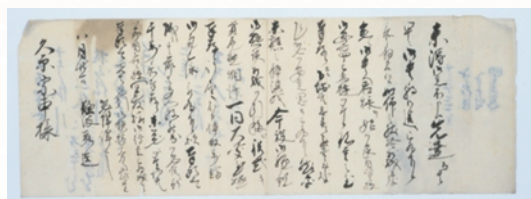
るなど、地域の医

療振興に努め、明

治二十九年（一八九六）、七十二歳で亡くなりました。

洪哉の長男・躬弦は東京大学の最初の卒業生で、理学博士として重職を歴任、晩年は京都帝国大学総長や帝国学士院会員を務め、わが国の化学の発展に大きな役割を果たしています。

次男・茂良は東京大学医学部を卒業して医者

父・難波周造から義父・久原宗甫への書簡
(津山洋学資料館寄託資料)

洪哉が養子に入った直後の挨拶状です



左：難波周造の墓(百谷) 右：洪哉の墓(津山・長安寺)

し医家としての久原家を継ぎ、苦田郡医師会の初代会長を務めるなど、地域の医療発展に尽力しました。なお、茂良の妻は香々美新町の武田家から迎えており、県会議員の後藤源治郎は義弟にあたります。

洪哉は町内で活躍したわけではありませんが、鏡野町域出身の人物で、その一族もこのように大きな功績を残したことは地域の誇りです。

久原家に関する資料は現在津山洋学資料館に寄託されており、随時展示しています。

参考資料：「津山藩医久原家と化学者久原躬弦」、
「久原躬弦書簡集」、
「津山洋学資料館友の会だより」ほか

協 力：津山洋学資料館、下山純正氏

協 力：津山洋学資料館、下山純正氏

生涯学習課 山下

電話(0868)54-7733